魔法使いの弟子

森下しあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法使いの弟子

【Ｎコード】
Ｎ９７３９Ｚ

【作者名】
森下しあ

【あらすじ】
ある事件で家族を亡くし、すっかり暗くなった少年、志魔野コウ。彼はある日”女子トイレに、なんでも願いを叶えてくれる魔女がいる”という噂を聞き、女子トイレで待ち伏せることに。そして本当に現われた魔女に、コウは”妹を生き返らせてくれ”と願った。すると、その代価に心臓を奪われ、コウは一度死んでしまう。
グレーテルと名乗るその魔女の妹が命を助けてくれるが……？
グレーテルの過去とは？少年の過去とは？魔女の目的とは？魔女と貧乏高校生の謎の共同生活がはじまる！

シマノ、生き返る

ソノ日ボクハ死ンダハズダッタ……

願イヲ叶エルタメニ死ニ、願イヲ叶エルタメニ生キタイト願ウ……

人間ハ愚カダ……

キーンコーンカーンコーン

からっと乾いた校庭に鳴り響いた、季節は夏。

ちょうど後1週間で夏休みが始まる。ふだんより格段に落ち着きが無くなった生徒達が自分の席から弾けるように離れ、友人の席へと向かう。

「ねぇ、あの噂聞いた？」

「女子トイレの魔女のはなしでしょ！」

「願いをなんでも叶えてくれるんだってね、私、彼氏ほしーなー。」

「わたしもー、あはは！」

その教室内で休み時間だというのに伏せている男子が一人。

特に寝ているわけでもなく、時々顔を上げては外を眺めて、また伏せる。

しかし、少年の目には一筋の光もなく、淀み、曇っていた。まさに虚ろな目をしていた。

「ねぇ、あの子だれか知ってる？」

「あ～目が怖いよね。どこ見てるか分からないし…」

「志魔野コウ…だっけ？なんか、家族が事件で死んじゃったらしいよ。」

「え、まじー！！可哀そうだね。」

「うわっ、やば！大きな声出すから、こっち見てんじゃん！」

夏休みの予定を話し合い、盛り上がるクラスメイトとは対照的に、この志魔野コウという男はクラスで浮いていた。

事件のこともあり、まわりからは話しかけがたく、しかも自発的に人と関わろうとしなくなったので、次第に誰も関わらなくなってい

った。

再びチャイムがなり、生徒達が席につく。志魔野は顔を上げ、ノートと教科書を取り出した。
そして、虚ろな目で黒板を見つめる。
シャーペンの芯を出しノートに書き込む。
また虚ろな目で黒板を見つめる。

この動作を放課後まで繰り返す。

いつもなら、誰よりも早く学校を出る志魔野であったが、今日は残ってひたすら参考書をといていた。

数時間後、教師がやってきて志魔野に話しかけた。それは彼にとって3日ぶりの会話だった。

「お、志魔野！やってるじゃないか。」

「…まぁ。」

「じゃあ、鍵は頼んだぞ！あと、あんまり頑張りすぎるなよ。」

「はい、さようなら…」

教師は去った。
思わず彼はニヤリとした。

本日の業務終了。

事件後、彼にとっては、人との関わりは何の意味もなさない、ただの煩わしい業務と判断され、学校では淡々と過ごすことにしていたのだった。

あたりは暗くなって、電気をつけないと何も見えないようになっていた。

夏なので、こんなに暗いということは、7時をこえているはずだ。

鍵を閉めると彼はどこかに向かって歩きだした。場所はトイレ。
ただし、それはただのトイレではなく、女子トイレであった。

女子トイレにはもちろん初めて入ったのだったが、意外と汚なかったことに志魔野は少しショックを受けた。そして、一番奥の洋式トイレの個室に入り、蓋のうえに座る。

0時までここで待たなければならなかったので、彼は仮眠をとることにした。

目をつぶると、いっそう鼻につく臭いを感じた。

レベルの高い変態なら快感なのかも知れない、などと彼は考えたが、そのうち、女子トイレに侵入して数時間過ごそうという自分も一種の変態なのだと悟ってしまった。

考えにふけっているうちに、彼はとうとう眠ってしまった。

そして００時００分
今日の休み時間女子が言っていた、あの時間がきた。

「ねぇ、ぼうや…」
艶っぽい声誰かがでささやく。

目を擦り隣を見ると黒い服の女がいた。

「あら、どうしたの？…私に会いに来てくれたんでしょ？」

そういって、女は長くて薄い色素の髪をかきあげ、彼の膝に向かい合うように座った。

彼の心臓はドクドクと高鳴った。
距離が近いとかそういう理由ではなく、本当に現れたという驚きや、願いがようやく叶うといった喜びや興奮によって、胸がいっぱいであった。

そんないっぱいに詰まった胸がいまだかつて無いぐらいにドクドク

振動している。心臓が飛び出そうだ。

「まぁ、だいたいそうだ。…本当に願いを叶えてくれるんだろうな？」

「もちろんよ。あっ、でもお話がしたいな～。君ん家にお邪魔してもいいかしら？」

「ああ、分かった。」

早く願いを叶えたいという思いが彼を急かしたが、なんとかその思いを押し殺した。女に機嫌を損なわれても困るからだ。

女は指をならした。
すると、景色は真っ暗な女子トイレから、いつものあの部屋に一瞬にして移り変わった。

「…魔女。」

彼の胸はすでに願いを叶えたいという思いがいっぱいに詰まっていたのに、さらにぐっと詰め込まれ、ドクドクと高鳴った。

もう吐きそうだ、心臓を。

「そんな驚かなくてもぉー。さぁ、お話はじめましょうか。」

魔女はそういうと、電気をつけた。

部屋は古いアパートでとても高校生が住んでいるとは思えない。

「…わたし、知ってるんだよ。君の名前や、君がなんでこんな部屋に住んでるのか。…願いはどうせ、家族を生き返らせて！でしょ？」

「…ハズレ。妹を生き返らせて欲しい。」

「ふーん、妹だけ？やっぱり変わってる。…あの学校に来たのは、たまたま君を道で見つけたからよ。」

「なんで俺を？」

「なんでって自分でわからないかなぁー。君って不気味で陰気よ。魔女に言われるんだから相当！あはは！」

言っていることとは裏腹に、無邪気に笑う。魔女も相当らしい。少し頭に来たが、志魔野はそのまま聞き続けた。

「その目、その目を見るとゾクゾクしちゃう。何も見ていないようで、一つのことしか見えていない、そんな目。魔女のそれと似ているわ。」

「……。」

「はいはい、願いを早くかなえろって顔ね。分かった。」

「一つ注意！魔女ってね、人間の願いを無償で叶えてはならないの。…等価交換ってやつ。」

「…別に妹を生き返らせてくれるんだったらなんでもするさ。」

「シスコンってやつかしら。君の心臓と引き換えに、妹を生き返らせてあげるね。」

「心臓？」

そう言おうと思ったとき、魔女は指を曲げて何かを呼び寄せる仕草をとった。

次の瞬間、信じらんないほどの痛みが彼を襲った。まるで全身をひきちぎられるような。

その痛みの波をこえると、周りは血の海だった。

もう一ミリも動けそうにない。死ぬんだと悟った。でもこれでいい。妹が助かるんだったらこのぐらい、別にいい。彼はそう思えたので、うっすらと笑いを浮かべた。

「やめなさい、ヘンゼル！」

そんな声が聞こえた。その瞬間とられた心臓があったはずのところから鼓動がした。

ドクドクという音とともに、活力が湧いてきた。

声の主を見てみると、また黒い服の女だった。しかし、さっきの魔女に比べ、この女は小柄だったが、同じ色の髪をしていた。

「あら、この子の邪魔までするの？可哀そうよ、じゃましちゃ。」

「あなたこそ、願いを叶える気なんてないんでしょ！」

「…まぁね。心臓さえいただけば、別にどうでもいいしね。それに、この願いはいくら私でも叶えてあげられないかも！」

「それ、どういうことよ！」

「あーもううるさい！そのブッサイクな顔、二度と見せないでね。じゃあ、ほうきは借りてくね！バイバイ！」

いったいどういうことなんだ…、生き返ったばかりの彼には大きすぎる衝撃で呆然としていた。

「…大丈夫？」

優しく声をかけたのは、小柄な黒い服の女だった。

「私は魔女のグレーテルよ。あいつの妹。あなたにはすごく悪いことをしてしまったから、わたしが償わせてもらうわ。」

「妹は生き返らないのか…？」

彼の目には絶望だけがうつっていた。他には何も写らない。

「残念だけど…。魔女は陰険でひどい生き物なの。特にあの女は。」

「お前は妹を生き返らせることは出来ないのか？」

「普通なら出来るんだけど、あの女がいうには無理のようね。あなたの妹はいま特殊な状態なんでしょう。」

「特殊？」

「わからないけど、多分、誰かに魂を囚われている。…あなたの妹はなぜ死んだの？」

「…それを話せば生き返らせることが出来るのか？」

「…いいえ。とにかくすぐは無理よ。」

「じゃあ、言わない。他に方法は？」

「ごめんなさい。…分からないわ。」

「…畜生！…役たたず！俺はこのためだけに生きてるんだ！命なんていらない、だから妹を生き返らせてくれよ！なぁ、こんなに頼んで…」

泣きながら発狂する彼に拳が飛んできた。おもいっきり。

彼は三メートルぐらい吹き飛んで、訳が分からず、そのまましゃが

みこんでいた。

「お前はバカか！妹、妹ってそればっかり…。そんなんじゃ妹を対生き返らせるなんて絶対無理よ！」

「黙れ！」

「あなたは死ぬところ…いいえ、一回は死んだ。それを生き返らせたのは誰だと思ってるの！勘違いもいい加減にして。私がいなかったら、妹どころか、あなたの命さえ無いところよ！」

しばらく沈黙の時間が流れた。

「…ごめん。」

「いいわ。そうなる気持ちも分かるから…。まだ願いを叶えたい？」

志魔野コウは深く頷いた。

「じゃあ、私の弟子になりなさい！そうすれば、そのうち妹を生き返ることができるかもしれないわ。」

シマノ、寝込みをおそう

キーンコーンカーンコーン

志魔野コウは目を覚ました。教室で寝ていたらしい。しかし、寝る前までの記憶がぽっかり抜けていた…。

起きたばかりで、完全に働かない脳を活動させ、考えてみる…。

弟子…、魔女の弟子になったんだ…。

そんな記憶に反し、気付けば教室にいた……と言うことは、あれは夢？

彼は馬鹿らしいあるわけないと思い、再び煩わしい作業へと戻っていった。

そして、今日も一番最初に教室をでて帰宅した。

家は高校からはかなり近く、歩いて２０分ほどのところにあった。

自転車ならもっと早いのだが、わけ有りでそんなものは持っていなかったので、毎日早歩きで帰るのだった。

さっき歩いてきた大通りとは違い、静かな路地にはいる。

それから１０分。
ようやく見えてくるのが彼のアパートだった。
築５０年という古い物件で、見た目どうり、風呂なし物件であった。

志魔野が住む部屋は、二階の４つの部屋のうち、階段側から数えて２番目であった。
古く塗装の剥げたドアを開けると、中は荷物がほとんどなく、あるのはぐちゃぐちゃになった布団と棚ぐらいだった。
彼は棚に近付き、ただいま、とつぶやいた。
これが彼の日課だった。
彼の話相手は、棚の一番上にある妹の写真だった。挨拶だけでなく、長く話すこともあった。
彼は今日、あの夢の話をした。魔女がいたこと、自分が死にかけたこと、魔女の弟子になったこと。
かなりはっきりした夢だっただけに、話が尽きなかった。
ようやく一段落話し終えると、彼には写真の妹が笑っているように感じた。
もともと笑っている写真だったが、より一層笑っているようだった。

これは全部夢のはずなのだが、やはり疲れたので、彼は寝ることにした。

ぐちゃぐちゃに入ろうとすると、何かがいる…？

なぜ今まで気付かなかったのだろうか。

一気に布団をめくりあげると、そこにいたのは夢のなかに出てきた魔女だったのだ！

「うわっ！」

と叫ぶと、隣の部屋から壁を叩く音がした。

うるさいってか？まだ夕方だぞ。と思ったのだが、魔女がいたことの方が衝撃が強く、怒りなど忘れていた。

魔女は魔女らしからぬ顔で、無防備に寝ていた。袖がない形状の黒いワンピースで、もともと短い丈なのにさらに短くなり、いい感じに白く細い足がのびていた。

彼はその足に妹を思い出した。

妹の名前は志魔野カオルだった。彼と同じ真っ黒な毛で、さらさらとした長い髪を二つにわけてみつあみをしていた。今どき珍しい古風な雰囲気を持ち合わせていた。

「カオル…。」

彼はその白い足を下から上に撫で上げた。

「…んっ、やめてよ。」

そのきわどい行動に魔女が気付き、起きてしまったようだ。

「えっと、あの、そのー…、これは違うんだ。」

「発情？」

「いや、だから、違うんだ。」

「人間の男に興味ないから、無理よ！」

「だから違う！」

結局、いくら弁解しても、駄目だった。事実、妹を思い出して触ってしまったというのもかなり気持ち悪い。

「あなた、弟子になったんでしょ。弟子がこんなことしていいのかしら。」

「違うんだ。何かいると思って触ったらこんな感じに…。」

「言い訳する子は嫌いよ。嘘がバレバレよ。だったらなんであなたは私の隣で添い寝していて、手は太ももにあって、顔がこんなに近いのよ！全く、これだから人間は…。」

魔女の言うとおりであった。彼は魔法が使えるだけでなく、弁もた

つことを発見し、少し感心したのだった。

「すいませんでした。あまりに綺麗な足だったので、うっかり触ってしまいました。」

「言わされてる感じが否めないわ。心から詫びなさいよ。」

「分かりました。本当にすいませんでした。」

「何か味気ないわ。まぁ良いわ。でも、寂しかったら、またこうして…うふふ。」

そういうと魔女はコウを抱き寄せた。足を絡ませ、悩ましげな声で耳元でこう囁く。

「…嘘よ。」

その瞬間寝技をかけられた。

「いった〜！痛い痛い痛い痛い。」

「魔女はこうゆう生き物なの。また痛い目に会わないように気を付けるのよ、変態！」

心から反省する志魔野だった。

シマノ、隣人に出会う

「まだ怒ってらっしゃるんですかー？」

「そんなに心は狭くないわ。それより、あいつに怒ってるの！」

「あいつ…？あいつってヘンゼルとかいうやつ？」

「そうよ。あなたもあいつに殺されたのよ！そんな飄々としていていいわけ？私は許せないわ。」

よくよく考えるとその通りだ。しかし、衝撃や痛みのせいか今では記憶はすっかり薄れていた。

「一番問題なのはほうきよ！あいつ、わたしのほうきを取って行きやがったわ！絶対許せない。」

グレーテルは姉のこととなると、気性が荒くなった。今にもなにか破壊しようとするように、右手にぐっと力を入れている。

そういえば、志魔野が殴られたときのぶっ飛びようといったら凄まじいものだった。

彼は、気を引き締めて挑まなくてはならないと覚悟した。

「お、俺もムカつくよ！」

「でしょ！そういうわけだから、今からほうき作りするわよ！」

「今…ですか？」

時計を見ると現在２２：００
もう外には出たくないんだが…

「さぁ、まずは、材料買いに行きましょうか！」

「…はい。」

「あまり乗り気出端誘うね。たしかこの辺に魔法用具屋があるはずなのよ。知らない？」

「え、グレーテルさんがご存知じゃないいんですか？」

「悪かったわね。人間界に来たのはこれがはじめてでね。なんかぽい所とかないの？」

「俺も最近引っ越してきたばっかりだから知らないよ。」

ドン！

また壁を殴る音…。階段を上ってすぐの部屋からだった。

志魔野はここに越してから、まだ隣人の顔を見たことがない。

面識があるのは、真下の部屋の西本さんというお姉さんだけだ。

「この建物、複数の人間が住んでいるのね！隣の人に聞いてみましょ？」

「…やめとけよ、隣のやつは壁なぐってくるし、一回も見たことがないから、多分ろくなやつじゃない。」

しかし、すでにグレーテルはいなかった。

「すいませーん！」
外で声が聞こえた。

「はい、お待ちください！」
聞きおぼえが無い男の声が聞こえた。

志魔野も外に出ていくと、そこには彼と同じぐらいの歳の男がいた。

「…どうも。」
そういって志魔野はドアをしめた。

彼は基本、ヘタレ人間なので、逃げるしかなかった。

隣の住人の容貌があまりにも予想がだったのだ。
志魔野と同じぐらいのとしに、髪は金髪、そして、顔はイケメンだった。

ずっと隣は駄目なオッサンが住んでいるものだと思っていたばかりに、かなり驚いてしまった。

「ただいまー！」

「おかえり…。」

「隣の人、いい人だったよ！それに、顔が…。」

「そうだな。」

「あれ、嫉妬？」

「違うし。で、どうだったんだ？」

「分からないけど、それっぽい所があるって言って、地図までもらったよ。」

「本当に親切だな。こんな怪しいやつなのに。」

「悪かったわね！私は魔女に誇りを持ってるの！だからこの黒服や帽子やほうきは絶対やめないわ。…さっ、行きましょうか。」

「人間界ではやめたほうがいいと思うぞ…。」

そんなこんなで、魔法用品店らしき所に出発することになったのだった。

シマノ、猫又に出会う

再びドアを開けると、そこにはさっきの美少年がいた。

顔は王子様といった印象なのに、ジャージにサンダルという、いかにも引きこもりみたいな格好をしている。

いい格好をすればもっとカッコよくなるだろうに。世の中には勿体ない人もいるもんだ。

「あ、初めまして！同じぐらいの歳の子が住んでたんでびっくりしました。」

「あはは、俺もです。てっきりおじさんが住んでるもんだと。」

「お互いさまです。これからはよろしくお願いしますね。」

「あ、はい。よろしくお願いします。」

完全に人のよさそうな感じだった。…あんなに壁を殴るのに。

「いってらしゃい！」

まぶしい笑顔で言った。顔のよさにより一層輝いているように見えた。

名前は聞いていないが、確か表札には、藤崎と書いていたはずだ。

「行ってきまーす！」
そんなことを考えていると、隣でグレーテルがいった。
魔女とはいえ、女は女。あのイケメンに反応しない訳がない。
…嫉妬？
なんだろう、この妙な感じ。
「なにボーッとしてるの？地図見なさいよ。」
「…地図？んー…これって、俺の学校の横じゃないか？」
記憶ではそんな場所はないはずだが、いつも誰より早く帰っていたので、学校の周りの状況は余り知らない。

「…ねぇ、あとどのくらい？」
「１０分ぐらい…。」
「無口ね。」
「まぁ、学校では喋らないしな。」
「ふーん。」

数歩歩いたとこで、彼女は志魔野の方を向いた。

「…ねぇ。」

「なんだ？」

「私とあなたが出会ってから、もう1日よね？」

「ああ、そうだな。」

「あなたはなんで、自分のことを話そうとしてくれないの？」

「そうでもないよ。ただ話すのが苦手なだけ。」

そういって彼はポケットに手を突っ込んだ。

「じゃあ、お名前は？」

「志魔野コウ…。」

「私になんて呼ばれたいですか？」

「コウ様。」

「却下。」

「お兄ちゃん。」

「ここまでシスコンだとは…。」

「嘘だよ。コウでいいよ。」

「本当に嘘？本当の本当に嘘？本当の本当の本当に嘘？」

「しつこい。」

「だって、お兄ちゃん変態なんだもん！」

声を高くして、アニメの萌キャラのように言った。

「変態言うな。」

「あながち嫌では無さそうですなー。顔がニヤケてますぞ、お兄ちゃん！」

「お前なー。」

「…コウ、そうやってずっと楽しそうな顔しててね。あの怖い顔は嫌よ。」

「な、何言ってんだ、急に。」

「別にー。じゃあ、インタビューごっこの続き。好きな食べ物は何ですか？」

「ハンバーグ。」

「すごく平凡ね。じゃあ、好きな妹は？」

「お前、調子のるなよ！だいたい、好きな妹ってなんだよ。」

「もうお兄ちゃんったら～。私は師匠、お兄ちゃんは弟子なんだよ！」

「はいはい。」

「次は真面目な質問。私のことなんて呼びたいですか？」

「バカ女。」

「速報！コウはネーミングセンスの欠片も持ち合わせていないようです！この件に関してグレーテル氏は、グレーテルで良いですよと、述べているようです。グレーテル氏は心が広いですね。」

「なに一人でコントやってるんだよ。着いたぞ、グレーテル。」

「速報です！志魔野氏がグレーテ…。」

「もう黙ってろ。」

ここに着くまで、グレーテルは呆れるほど話しかけてきた。

本当に呆れるほどに。

「はーい。」

ムスッとした顔でグレーテルは言った。

当着地はただの駄菓子屋ねようだった。

「駄菓子屋じゃん。」

「いいえ、違うわ。中から魔力を感じるし、結界も貼ってある。」

グレーテルのさすほうを見ると、うっすら文字のようなものが書いてあるのが見えた。

現在２２時４７分。

「すいませーん！」

そんな時間にも関わらず、グレーテルは駄菓子屋に声をかけた。

５分ほどたったのだが、誰も現れない。

「…仕方ないわ。」

「ちょっと、待てよ！」

グレーテルは不法侵入でもしそうな雰囲気だ。それは止めさせなければ。

「なかの様子を確かめさせるわ。…我に仕えし魔獣よ、目覚めたまえ。」

呪文のようなものを唱えると、彼女は二つ折りの黄色い紙をとりだした。

その紙を地面に置き、紙を開いたとたん、緑色の火がボワッとついた。

「うわっ！」

まさか火が出るなんて思っていなかったので、志魔野は腰を抜かしてしまった。

そして、その妖しく輝く火のなかから黒いなにかが出てきた。

「…猫？！」

「猫って言うな。これはれっきとした猫又よ。ほら、尻尾が別れてるでしょ！」

グレーテルの言うように、黒猫の尻尾は一本ではなく、数本あるようだった。

その数本の尻尾は別々に動き、どこか不気味なようすだった。

「にゃー！」

猫は一鳴きすると、志魔野の方に佐擦り寄ってきた。

「ふーん、コウの事が気に入ったんだって。」

「そ、そうなのか。」

動物に好かれるというのは初めての経験だったので志魔野は少し戸惑った。

いつもは嫌われて、逃げられるか、引っ掻かれるようなレベルなのに…。

「にゃー、にゃにゃ。」

猫の声かと思ったのだが、よく聞くとグレーテルから声が聞こえた。

「なに見てんのよ。恥ずかしいんだから！猫語は魔女の必修科目なの。」

そんな物なのか。魔女も大変だな…、と志魔野が思っていると、猫が壁をすり抜けて駄菓子屋の中に入っていった。

シマノ、結界を解く

それから１０分。

「…なかなか帰って来ないな。」

「もしかしたら、中でなにかあったのかも。強引だけど、今から結界を解くわ。」

「結界を？」

「あの猫又は結界除けの力があるけど、私やコウのように、魔力がある者は入れないようになってるの。」

「俺に魔力？」

「コウの心臓は私が補ってるの。つまり、あなたは魔力で生きている。魔女と同じような仕組みで動いてるから、結界にひっかかってしまうわ。」

そんなことを説明している間にも、グレーテルはずっとチョークのようなもので何かを書いている。

「コウはそこに立ってて！」

「わかった！」

グレーテルに指示されたように、星のような模様の所に立った。

「この結界はかなり強いものだから、簡単には解けない。…悪いけど、あなたの力を貸してもらうわ。」

グレーテルは魔方陣を書き終えたようだった。

魔方陣は丸く駄菓子屋を囲み、中にはよく分からない文字のようなものや、星が描かれていた。

「さぁ、始めるわ！コウはそこから出ちゃだめよ。」

そういってグレーテルはなにやらぶつぶつ呟きだした。

すると、駄菓子屋の古い引き戸はガタガタと揺れだし、それは家全体へと伝わっていった。

その動きがピタッと収まると、また激しく、いっそう激しく揺れ、すべての扉や窓が開いた。

「……！」

「やっぱり、ね…。」

「なにが？」

「いいえ、何も無いわ。とにかく協力ありがと。」

ここの所驚く事が多すぎて、少しは慣れてきたようだった。

古い引き戸から中に入ると、そこはやはり駄菓子屋だった。

一階はほとんど駄菓子屋で、奥に小さい畳の部屋が一室あるだけだった。

二階に登ると、さっきの猫又がいた。そして、横には人の足…？！

手と足は縄で縛られており、口はガムテープ…という、典型的な監禁スタイルだった。

「…っん！んっ！」

ガムテープがあって喋れないようだった。

今の時代珍しく着物を着ていたので、胸元ははだけ、すこし露出した肌は汗ばんでいる。

そのせいか、縛られているせいか、すごく色っぽい。……こんな時に不謹慎だが。

グレーテルが指をパチンと鳴らすと、縄は緩み、ガムテープは剥がれた。

「…んはぁ！死ぬかと思ったー！助けてくれてありがとう。」

本人は意外にも元気だった。

「…もしかして、グレーテル様？！」

「ええ、そうですけど。」

グレーテルなにか不満そうに答えた。

「グレーテル様に会えるなんて光栄だわ！」

この口ぶりからして、グレーテルは偉い人…いや、偉い魔女なのだろうか？

「こちらこそありがとう。それより、これは誰にやられたの？」

「ごめんなさい。顔は覚えていないの。魔女で…イテッ！」

「いいわ、ありがとう。多分あなたは忘却魔法をかけられているわ。少し休んでちょうだい。もしよければ、その間、この辺りを調べたいんだけれど、良いかしら？」

「すいません、そうさせていただきます。どうぞ、お好きなだけ調べて下さい！」

「さぁ、コウ、これは誰の仕業だか分かるかしら？この辺りにまだ、魔力が残っているわ。」

シマノ、魔力を感じる

「あなたはそろそろ魔力が目覚めているから、きっと分かるはずよ。」

挑発的な目でグレーテルは言った。初めて師匠らしいことを言ったのではないだろうか。

「…魔力？俺は人間だぞ？いくら魔女の弟子になったとはいえ、そんなことあるのか？」

「いいえ、無いわ。でもコウは特別よ。ほら、ここに手を当てて。」

そういって、グレーテルは志魔野の手をとり、先ほど女性が倒れていた所に持っていった。

「目をつぶって……。さぁ、手に神経を集中させて……。」

白くて細長い、そして柔らかい手が志魔野の手の上で動く。

指示されたように目をつぶり、神経を集中させると、何か力が流れてくるようだった。

なにかに似ている。…俺の心臓から感じる力に似ているが、何かが違う。

邪悪で悪意のようなものが入りこんでいる感じ。

……思い出した。

俺が死んだときのあの感じに似ている。

ハッと集中の糸が切れた。答えたはわかった。…だが、そのとたん、手の方が気になって…。

綺麗な手……。

そこから目線を上にやると、細くすらりと伸びた白い腕、肩にはさらさらとした髪の毛がかかっている。顔を見ると、まるで人形みたいに綺麗な形の目に長い睫毛、整った口にすらりとした鼻がある。

まさに美少女といってもいい部類の顔立ちだ。

あらためて、まじまじとグレーテルを見ると、胸が高鳴った。

「…ねぇ、そろそろ良いかしら。」

「えっ…？」

気付くと志魔野の目線はグレーテルの顔にあった。

グレーテルの顔は当然歪んでいる。

「なに見てんのよ…。全く、わかった？」

「ああ、わかったよ。あいつだろ、ヘンゼル。」

「正解…だけど、手放してくれない？」

気付くと、下にあった志魔野の手はグレーテルの手の上に、そして、しっかり握っていた。

「あ、ごめん！」

最近なにかと歯止めが利かないことが多い気がする…。

「……つまりね、あいつはまた私の邪魔をしてきたってことなのっ！」

「また？」

「そう、あなたを殺したのも私の邪魔をするため…。昔からあいつはなにもかも邪魔してくるの！」

「俺はお前の邪魔のために死んだのか…。なんか、切なくなる話だな…。」

「あっ、ごめん。……でも、この際だから言っておく。私の目的は、ヘンゼルを殺すこと。そして、ヘンゼルを殺せば、あなたは心臓を

取り戻し、完全に人間になれるの。そのうち妹も…。」

「…だから俺を弟子にしてくれたのか…？」

「まぁね。だいたいそうよ！物分かりが良くなって来たじゃない。」

そういった彼女の顔はなにか悲しげで、まだなにか隠していることがありそうだった。

「……そのためには、まず、ほうきを作らなくっちゃね！」

ヘンゼル、魔王に会いに行く

「こ・ん・に・ち・わ！だーれだ？」

「……ヘンゼル、…だろ？」

広く薄暗い部屋にこだます男女の声…。

部屋はモノトーンで統一され、床は大理石のようなものでできており、壁紙は黒い。家具らしきものはほとんどなく、真ん中に黒いベッドが置いてあるだけだった。…それにしても、生活感がない。

「当ったり～！もう、すぐ当てちゃ、つまんない！」

「そんなこと言われてもな…。」

男は少しわらうと、部屋に唯一置いてあるベッドから起き上がった。

「まだ完全に目覚めないの？」

「ああ、まだ準備は整ってない…。」

ヘンゼルは男に絡みついて、手を背中にまわし、口元を男の耳元に近づけ、挑発的に

「魔界の魔王様ともある人がこんなざまじゃね…。」

「…ったく、やめろよ。お前のよくない癖だ。頼みがあったらすぐ色仕掛け。今日の頼みはなんだ？」

男は呆れたように言って、頭を掻いた。

「そんなんじゃないわ！」

「ふーん。じゃあ、こういうことしに来たのか？」

そういって、男は彼女を押し倒し、手首をつかみ、グッとベッドに押し付けた。

「…それも違うわ！ばーか！」

「はいはい、わかってるって。別に俺、欲求不満じゃねーし。」

そういってグレーテルの手をあっさり放すと、ベッドのふちに座りなおした。

「今日は、ほんっとに、あなたに会いに来ただけなの！」

「ふーん、それだけか怪しいもんだ。」

「……ただ、聞きたいことが一つあるの。あなた、最近女を連れて歩いてるそうね。その子誰なの？」

「…っ、嫉妬か？」

男は笑いを押し殺したような声で言った。

「ちーがーう！」

「別に、あいつは、ただの人間だ。俺の玩具ってとこかな。」

にやにやして男は言った。

「……玩具？」

「別に、いかがわしいことはしちゃいないよ。」

「ふーん。」

「……なんか、嬉しそうだな。安心したか？」

「だから、違うって！自意識過剰男め！」

「はいはい。少なくても、俺はお前のこと特別だと思ってるよ。……こんな風に話せるのは、お前といる時だけだ。お前もだろ？俺以外にお前が動揺してるのは見たことないしな。」

「……はいはい、そうですよ。」

「ほらな！いつも外では余裕ぶりやがって、俺には弱いだろ？」

「はいはい。そうやっていい気になってるといいわ。じゃあ、私、忙しいから行くわね！」

「また来いよ！」

「絶対行かないから！」

シマノ、目覚める

……眠い。目蓋が重く、目を開けようとすると少し痛い。

寝る前の記憶を蘇らせる。たしか、ほうきを作りにいって…。

「……少し良いかしら？あなた名前は？」

乱れた服をなおして、休んでいたらしい女にグレーテルは話しかけた。

「わたくしは、アスミと申します。」

「あなたがこの店の主かしら？」

「いいえ、ご主人様はとある用事がありまして、ただいま留守にしております。そのせいで結界が弱まって、敵の侵入を許してしまったのです……。大変、不甲斐ない…で…す……。」

そういって、アスミと名乗る少女は泣き出してしまった。

「…そ、そんなこと無いと思うよ。あんな凄い魔力を持った魔女にやられるなんて当たり前…だと思うんだけど…？」

コウは自信なさげに、グレーテルの方を見た。

「わかってるじゃない。その通りよ、コウ。この事件の犯人はヘンゼル……あなたも知ってるでしょ？」

「ヘンゼル…さ、ま？まさか、本当に？」

「そう、それが彼女の本性。コウにも一度説明しておくわ。ヘンゼル…そして私はただの魔女ではなく、貴族階級の魔女なの…。そして貴族の中でも私たちの家は三大名家の中の一つ、ユーリシュビッツ家。

だから、魔界ではちょっとした有名人ってわけ。

そして、ヘンゼルの野望は一つ。魔界を自ら支配すること。

それを阻止するために私が人間界にやってきたの。」

いつになく真剣な声でグレーテルは説明した。

志魔野も驚いたのだが、グレーテルが常に兼ね備えている優美さや、言葉遣いの美しさを感じ取っていたのか、当然のことのように思えた。

「…アスミさんも疲れたでしょうから、今日は帰ります。主人が帰ってきたら、伝えてくださる？その時にまた来るわ。」

…思い出した、そういって昨日は帰ってきたのだった。

ようやく目が覚めて、脳が覚醒してきたようだったので、目を開けた。

季節は夏。まだ本番と言うわけではないが、やはり暑い。

こんなボロアパートにはもちろんクーラーはない。それどころか、扇風機も……。

体はじっとりと湿っている。凄く気持ちわるい。

よく見るといつも寝ている場所ではなく、そこから少し離れた畳の上に、そのまま転がっていた。

そして、布団の布いてある場所には……、グレーテル。

やはり暑かったのか、彼女の横には誇りであるはずの、黒い服が脱ぎ捨てられていた。

……ということは…？

パッと反射的に上半身を起こし、グレーテルの方を見た。
期待通り、彼女は下着だった。しかも白。
外が黒いから、てっきり中も黒だと思い込んでいた。
グレーテルを起こさないように、志魔野は静かに移動した。
そして、寝ているグレーテルに馬乗りになり、手首を掴んだ。
…しかしまだ起きない。
このまま、彼女の胸でも……と思った志魔野だったが、その瞬間、背後から誰かに殴られた。

「いってぇ！！」

「コウの変態！」

声の正体はもちろん、グレーテルだった。

「…これからコウの家で寝泊まりするだろうから、試してみたの！…私を襲わないかね。」

「お、襲ったんではなくて…、えっと、触ろうと……。」

「一緒よ。信用ならないわ。」

「……そ、そうだ、これは誰なんだよ。」

そういって志魔野は下着姿のグレーテルを差した。

「それは、私の魔法で猫又を変化させてるの。でも、話逸らそうったって無駄よ。」

「そうじゃないで……ってもう８時２０分かよ！」

「あら、どうしたの？」

「学校だよ、学校！」

「ふーん、それより朝ごはんは？」

「んなもん無いよ！」

志魔野は着替えながら言った。

「じゃあ、行ってきます！」

志魔野はそれから１分以内に用意をすませ、家を出ていった。

「……そんなに焦らなくても、私の魔法があるのに。今日はムカつくから教えてあげないけど。」

グレーテル、助けられる

キーンコーンカーンコーン

また今日も志魔野にとっての煩わしい作業、学校が始まる。

一昨日から昨日にかけての出来事がまるで嘘のように、またいつもの日々が始まった。

「うーん…。なにかいい方法はないかしら。」

その頃、グレーテルは悩んでいた。今日の朝の事についてだ。

コウに触られるのは、そこまで嫌ではないが、弟子の教育上良くないのは明確だ。

「…そうだわ、壁を作りましょう！」

そういってグレーテルは指を弾いた。

その瞬間、白い壁がパッと現れたのだが、グレーテルはなにか気に

入らなかった。
もともと狭い部屋に仕切りを作ればさらに狭くなるばかりで、グレーテルはこの圧迫感に耐えれる気がしなかった。
「駄目ねぇ……。先にご飯を食べましょう。」
グレーテルは壁をもとに戻し、外に出た。
部屋には冷蔵庫や食べ物の類はなく、食材があるという期待がなかったからである。

外には同じような小さなアパートが並んでいた。そこから少し歩いて大通りまでいくとコンビニがあった。
グレーテルは人間界にしばらくいたうちに知ったのだ、コンビニの存在を。

「どれにしようかしら。」
コンビニに入ったグレーテル。その服装はコンビニでは完全に浮いていたが、お構い無しに棚を見つめていた。
「これにしましょ。」
そういって選んだのは、唐揚げ弁当。さらに不釣り合いである。
そして、弁当を持ちレジへ行くかと思われたのだが、そのまま直進

し、出入口の扉の取っ手に手を掛けたその瞬間……

「ちょっとお客さん？お金は？」

「お金？なにかしら。」

「あんた、お金よ！とぼけてんじゃないよ！」

当然のことながら、おばちゃん、といった感じのコンビニ店員に止められてしまった。

「まぁ、待ってください。」

そこに現れたのは、

「お隣さん！？」

「お金なら僕が払いますんで、許してやってください。」

「……わ、分かったわ。」

男の美貌のおかげかどうかは分からないが、店員は許してくれたようだった。

「あ、ありがと。」

「ううん、いいよ。…それより、お金知らないの？アハハ、不思議な子だね。」

「うん、そうかなー？自分で物とか買ったことなくてね…。」

「そうなんだ！もしかして、凄いお嬢様…とか？まさか、異世界から来た…なんてね。」

「……そ、そんなんじゃないわ。ただ、世間知らずなだけよ！」

そんな会話をしながら二人はアパートに帰っていった。

グレーテルが名前を聞くと、お隣さんの名は「藤崎リョウイチ」というらしい。

そして、そのリョウイチから一緒に食べないか、というお誘いがあったので、グレーテルさリョウイチの部屋で食べる事にした。

「…お邪魔しまーす。」

「どうぞ～、汚い部屋だけどね。」

リョウイチにそう案内された部屋は、やはりコウの部屋と同じであったが、コウとは違い、荷物がたくさんあった。

しかし、ある程度整理されていて、汚いというほどではなかった。

「お腹すいたね？」

「そうだね、じゃあいただきます！」

そうすると、グレーテルも続いた。

「リョウイチは何買ったの？」

「俺も唐揚げ弁当だよ。グレーテルちゃん意外だね、そんな細いのに。」

「え、本当に？」

そんなふうに話すグレーテルはいつもより可愛らしい話し方になっていた。

「そうだ、俺のこと、リョウイチって呼んでるけど、長いでしょ？」

「別にそこまで長くは…。」

「イッチーって呼んで！そのほうが呼びやすいだろ？」

「うん、じゃあ、イッチーね！」

リョウイチはコウとは違い、よく話してくれた。話題も面白く、グ

レーテルは食事後もすっかり夢中になって話を聞いた。

「ねぇ、グレーテルちゃんは隣の子とどういう関係なの？最近だよね、ここに来たの。」

「まぁ、師匠と弟子…みたいな…。」

「ふーん、面白いね。すっかり恋人同士か何かだと思ってた。」

「ううん、そんなことないよ、あいつ変態だし…。ご飯も用意してくれないし。」

「…じゃあさ、俺の部屋で住まない？俺は大歓迎だよ！」

「えっ…、でも…」

グレーテルがそう言いかけたとき、隣の部屋の扉が開く音がした。

「あ、ごめん、コウ帰って来たから帰るね。」

そういったグレーテルが大急ぎで玄関にたった。

「…うん、じゃあまた来てね。バイバイ！」

「バイバイ！」

「…コウ？お帰りなさい！」

「あぁ、グレーテルか。ただいま。どこ行ってたんだ？」

「隣のイッチーの所よ。」

「ふーん、隣、イッチーっていうのか。」

「そう、イッチーが今日助けてくれたの！」

そういったグレーテルは説明を続けた。その間、コウはご飯の用意をしていた。

「…って訳なの！コウのせいなんだからね！」

「はいはい、じゃあ、４２０円。ちゃんと返すんだぞ。」
ご飯の支度を済ませると、コウは財布からお金を取り出した。

「うん！分かったわ。」

「…食費かー、きついな…。」

そう呟きながらコウはご飯を食べはじめた。

机にはもやし炒めと食パンという、ご飯にしてはかり貧相なモノだ

った。

「コウ、これで足りるの？」

「うちにはお金がないから仕方ないの。お前も俺の家に住むなら文句は言わないことだ。」

「ごめんね…。」

貧乏な暮らしなどしたことが無いグレーテルにとってはこの事はかなりの衝撃だった。

「あ、それから、今からバイト行くから、留守番よろしく。夜ご飯は持って帰って来てやるから待ってろ。」

そういうとすぐにコウは行ってしまった。

シマノ、銭湯に行く

「ただいまー…。起きてる、グレーテル？」

部屋は暗く、電気がついていなかった。

「うん、起きてるわよ。」

そういって、グレーテルは人差し指の先に光の玉を出して部屋を照らした。

座っていたグレーテルは立ち上がり、それから電気をつけた。

「飯持ってかえって来てやったぞ。……ハンバーグだ！ちょっと冷えてるけど、美味しいと思うぞ。」

「ありがとう！でも、コウはいいの？」

「…気遣ってるのか？いいよ、いらない。」

「……ううん、はんぶんこ。」

そうして食べたハンバーグは美味しかった。

「…そう言えば、コウ、バイトってなにかしら？」

「働きにいってるんだ。お金稼ぐためにな。」

「ふーん、大変ね。」

「まぁな。貧乏だから仕方ないけど。…それより、この後、お風呂行かないか？」

「え、この家、お風呂なんかあったっけ？？」

「……ない。改めて言うと悲しいな。」

「じゃあ、どこに？」

「ここから１０分ぐらい歩いたところに銭湯があるんだよ。」

「銭湯？へー…はなれみたいな所かしら？」

「……違うけど、もういい。行こうか。」

コウは押し入れを開けて用意を始めた。

「……お前、着替えとか持ってないのか？」

「まぁ、魔法で転送すれば出てくるんだけど、ちょっと訳ありで……。」

「わかった、俺のでよければ貸すよ。」

「うん、ありがとう。」

そして、二人で家を出た。銭湯につくと、それなりの時間だったので、あまり人はいなかった。

「お前はあっち、俺はこっちだ。わかったか、さっきに言った通りにするんだぞ！」

「ふーん、別れちゃうのね。一緒に入りたかったなー。」

「……黙れ。じゃあな！」

「うん、バイバイ！」

グレーテルにははじめての体験で、何もかもが新鮮だった。

「……市民の共同入浴場というわけね。」

中はあまり人がいなくて、広々くつろげそうだった。

「おー、私の家のお風呂の半分ぐらいかしらね。」

グレーテルは後ろの壁にもたれかかった。そして壁を見ると絵が富士山の書かれていた。

（この壁の向こうにコウがいるのね。）

「コウー！いる？」

グレーテルは大きな声で聞いた。

お風呂は良いもんだ、と思い、くつろいでいたコウは行きなり驚いた。

（な、なんだ！？）

「居ないのかしら？コーウー？！」

このまま止めなければグレーテルはずっと言い続けるだろう、とコウは考え、今まで知らないふりをしていたが、コウは答えることにした。

「いるよ！黙れ！」

「はーい！」

（全くあいつは恥ずかしく無いのかよ……。）

そう思ったコウだった。そして、周りの視線が痛かったが、せっかく来たのだから、という思いを糧にその後もお風呂を満喫した。

「…ったく、こっちはどんな恥ずかしい思いしたのか分かってんのか？」

「えっ、ごめんなさい。」

「これからは、外ではうるさくしない。分かったな？」

「はーい、分かりました。」

シマノ、罠にかかる

「意外と良かったわ。せん…と…う、だっけ？」

「だろ！まぁ、これから通うことになるからな。」

その時、ガッシャーンと音がした。

「何っ！？」

「ああ！！ガラスが！」

部屋には硝子の破片とフクロウの姿があった。

「伝書フクロウということは、……魔法用品店からね。」

「フクロウなんて始めて……って、ガラス！！大家さんに怒られるし、金とられるー！ヤバイ、今月どうやって生活すればいいんだ？」

このガラス一枚で、家計は逼迫するほど、お金に余裕が無い。それはグレーテルのせいでもあったのだが……。

「仕方ない、わたしが治してあげるわ！」

グレーテルは硝子の欠片を一つ拾い上げると、窓枠の方にもっていき、こう唱えた。

「物質の神よ、我に姿を取り戻す力を与えよ！リペアード！！」

すると、床に落ちた破片が、窓枠に吸い込まれるように動き出し、割れ目は埋められていった。

こうなるともう、元のガラスだ。

「おお！スゲェ！」

「まぁね。私にとっては朝飯前のことよ。」

――――バサバサッ

フクロウが羽を広げて部屋中を飛び回る。上からはふわふわと羽が落ちる。それと同時に、何か四角いものが落ちた。

「…手紙？」

「ええ、多分魔法用品店からね。」

グレーテルが指を曲げると、手紙は浮き上がり、目の前までやってきた。

そして手紙を軽く指で叩くと、封はあき、便箋の中から薄桃色の紙が出てきた。

グレーテルはそれを手に取り、読み出した。

「…魔法用品店の主人が帰って来たようね。明日、また行きましょう。」

そうして、志魔野とグレーテルは寝ることにした。

前回のこともあり、グレーテルは壁ぎわにコウ布団を持っていき、寝ていた。

それに対して志魔野は、グレーテルの命令により、対極の壁ぎわで寝ることになった。

「…グレーテル？」

電気を消してからしばらく、グレーテルは眠ったようだった。

「寝たのか……。」

そういって志魔野は立ち上がり、あの写真のほうへ向かった。

前は毎日欠かさず妹に話しかけていたが、最近はあまり話しかけていなかった。

グレーテルがいるので、話し相手にも困らない。しかし、それでは妹に申し訳ない気がしたからだ。

志魔野は最近の出来事を説明したり、グレーテルのことを紹介したりした。

そして、最後にこういった。

「…グレーテルが、いつかカオルを生き返らせることが出来るかもしれないって言ってたんだ。だから、待ってろよ。俺は絶対諦めないからな。……じゃあ、おやすみ。」

志魔野はまた立ち上がり、壁ぎわまで足音を立てないように歩いていき、眠った。

――――ピピピッ
目覚しが鳴る。
志魔野が止めると、グレーテルはまだ寝ていた。
「はぁ…、まだ寝てるのか。」
そういって、志魔野は朝ごはんの準備を始めた。
いつもは作らないのだが、グレーテルのためにも作ってやることにした。
「よし、ただの食パン出来た！……やっぱ、自分で言うのは悲しいな。」
それはは食パンにバターを塗った、という簡単なものだった。
それから、コップに麦茶を入れる。志魔野はもしグレーテルに合わない、と言われても、夏は麦茶だ。と言い返してやろうと考えた。
実際、麦茶か水しか選択肢は無いのだが。
それから志魔野は制服に着替えた。別にまだ着替えなくても良かったのだが、グレーテルがいるところで着替えるのもなんだと思い、

着替えることにした。

用意が整ったところで、グレーテルを起こすことにした。

グレーテルのすぐ横までいき、声をかけた。

「起きろ、朝ごはん出来たぞ！」

志魔野はまたグレーテルを見て、妹を思い出した。

妹がいるときは、こうやって起こしたものだ、と。どちらかというと起こされるほうが多かったが。

しかし、グレーテルはまだ起きなかった。一筋縄ではいかないようだ。

こんどは体を揺さ振ってみることにした。

「起き…」

そう言った瞬間、上からタライが落ちてきた。

まるで昔のコント番組のように。

「……コウ！またエッチなことしようとしたわね！変態！！」

さすがにこれには、志魔野も怒った。

「俺は起こしてやっただけだ！なのになんでタライが上から落ちてくんだよ！」

「…あれ！？そうなの？発動条件は整ってないはずなんだけど…？それが本当なら、ごめんなさい。」

「…もういい、朝ごはん食べるぞ。」

「やったー！作ってくれたのね。」

「「いただきまーす！」」

グレーテルは文句も言わず朝ごはんを食べた。麦茶の件もなにも言わなかった。

「…おかしいわ。わたしの得意分野である発動魔法が誤作動するなんて…。」

「発動…魔法？なんだ、それ。」

「発動魔法っていうのは、魔法をかけて条件を決めておくと、その条件が整えば自動で発動する魔法のことよ。」

「…さっきは、その条件が整てないのに発動したと。」

「そう。」

「グレーテルが間違ったんじゃないのか？」

「いいえ、発動魔法にかけてわたしの右に出るものはいないわ。」

「…ずいぶんと自信があるんだな。」

「まぁね。」

「よし、忘れよう！これ以上考えても仕方ないよ。」

「そうね。」

「じゃあ行ってきまーす！あ、あと、今日もバイトあるから、遅くなる。」

「分かったわ。でも、魔法用品店に行くことを忘れないようにね？いってらっしゃい。」

コウは出ていった。

さっきはもういい、と言っていたグレーテルだったが、こればかりは妥協できない、と原因を調べることにした。

グレーテル、調べる

まずグレーテルは部屋にあった写真を見た。

「これが志魔野コウの妹……。」

そこには可愛らしいおさげの女の子の姿があった。横にはコウがいて、今よりまだ幼い様子だった。

「名前は…志魔野カオル、ね。」

グレーテルは昨日の夜、志魔野が妹の写真に話しかけていたのを聞いていたのだ。

ここにいてもそれ以上情報は入ってこない、とグレーテルは思い、魔法用品店に行くことにしたのであった。

外に出ると、道には結構人がいた。いつもは夜遅い時間にしか出かけないため、さらに多いように感じられた。しかも、グレーテルすれ違う道行く通行人に注目された。あの黒い服では町で浮くのも仕方ない。

「すいません。グレーテルですが……。」

少し道に迷ったりもしたのだが、グレーテルはなんとか駄菓子屋につくことができた。

「どうぞ、そこの扉からお入りください。」

そういったのは聞き覚えのある少女の声だった。

木枠がすこし古くなったガラス戸をあけると、そこには魔法用品がたくさん並び、怪しい空気を醸し出していた。たしかこの前は、ただの駄菓子屋だったはずなのに……。

「ようこそいらっしゃいました、グレーテル様。こちらでございます。」

そこにはこの前より落ち着いた雰囲気のアスミがいた。アスミはグレーテルを案内し、店の奥の部屋へと連れて行った。

「ご主人様、グレーテル様をお連れしました。」

「どうも、グレーテルです。」

「あなたが、あのグレーテル。この間はアスミを助けてもらって感謝してるよ。」

そういったのは、この店の女主人だった。やはり、アスミと同じように着物を着ており、年は２０代後半から３０代といったところで、上品というより、店主としての風格があるという感じだった。

「見事な空間魔法ですね。おそらく、ここは魔界の一部を人間界にある店とつなげているのでしょう？」

「ご名答、さすがユーシュビッツ家のお嬢様ってとこだね。アスミ、お茶とお菓子とってきておくれ。」

主人がそういうと、アスミはさっと部屋を出た。

「私の名前はナズナ。魔法用品店の店主本業で、人間界では駄菓子屋のおばちゃんよ。」

「私は知ってのとおり、ユーシュビッツ家の次女、グレーテルよ。ナズナさんはあのこと知っているかしら？」

「まぁ、もちろん知っているわ。あなたが魔界法第1条の違反で指名手配されてるんでしょ。魔界では今そのニュースで持ちきりよ。私も職業柄、よーく知っているわ。ユーシュビッツ家との取引もあるし。」

その言葉を聞くと、グレーテルの顔が曇った。

「……もしかして、私のこと通報したりしているのかしら？」

「いいえ、言ったでしょ。よく知ってるって。黙っといてやるよ。」

「ありがとう。……でも、あなたに言っておくことがあるわ。」

「なんだい？」

「魔界法第1条”魔界の平和を脅かすものは死刑に処する……。でも、私はこの罪を犯してはいないわ。真実は……」

シマノ、核心に迫られる

「この前の魔界大混乱を引き起こした正体は私ではなく、ヘンゼルよ。あいつの強力な妨害魔法で人々の魔法を妨害し、魔界社会のシステムを混乱に陥れた。私はもともと魔法システムを管理していたし、発動魔法が専門分野だから犯人に仕立て上げることは簡単だったはずよ。」

「……ヘンゼルはなぜそんなことをしたんだ？」

「私にもわからないわ。でも、目的は魔界を支配すること。今はそれしかわかっていないの。……だから、私はヘンゼルの野望を打ち砕いて魔界を守る。例え指名手配されていたとしてもね。」

「それなら、あなたが魔法警察に弁解して、ヘンゼルが真犯人だといえばいいんじゃないの？」

グレーテルは目を伏せていった。

「……そんな簡単なことじゃないの。ヘンゼルは巨大な組織とも組んでいるわ。きっと魔法警察も彼女に取りいられているはず……。魔界に私の味方はいないわ。だからこそ、私が直接ヘンゼルを捕まえるの。」

「ずいぶんお転婆なお嬢様ね。そんなんじゃ、あのずる賢いヘンゼルを捕まえることなんかできないわ。正々堂々とするだけじゃできないこともあることを知りなさい。……あんたは危なっかしくて見てられないよ。私はあんたの味方だよ、それだけは覚えてな！」

そういってナズナは微笑んだ。まるで子供を見守る母親のような目をしていた。

「ご主人様、お茶をもってまいりました。」

「さぁ、お茶も来たことだし、ゆっくり話すか。」

ナズナはそう切り出した。

お茶は2人とも着物を着ているだけあって煎茶だったが、お菓子はふつうのお茶菓子ではなく、駄菓子屋に並べてあったようなものだった。

「ありがとうございます。」

グレーテルは2つの意味でそういった。魔界を追放されて以来、味方が一切いない状態だったので、さっきのナズナの言葉がとても心にしみた。

「……実は今日は、2つ用件があって……。」

「なんだい？」

「一つは私がいっしょに住まわせてもらっている少年が来てからでお話したいんですが、もう一つは、ほうきのことで……。」

「ほうきならナズナ魔法用品店にお任せよ！」

そういうと、ナズナは人差し指をだし、山を描くように動かした。

すると、今までいた数十種類の部屋にほうきが現れた。

「東の国から西の国まで、ありとあらゆるほうきがそろってるよ。ちなみに魔法の絨毯もあるわ。」

「絨毯はちょっと……。とりあえず、前のほうきと同じ機種がほしいんですけど、ありますか？千年物のグラン・デ・シューベロン社のほうき。」

「一流ブランドの千年物……、最高ランクね。さすがお嬢様ってかんじだわ。あるにはあるんだけどね、お金はあるかい？」

その言葉を聞いてグレーテルはドキッとした。今まで一度もお金で困ったことはなかった。なのにこんな大切な時にないなんて……。

「一応魔界からちょっとだけは持ってきたんだけど……。」

そういってグレーテルは袋からあふれんばかりの金貨を取り出した。

「これねー…、だいたい半分ってとこかしら。」

かなりの金額のはずなのだが、これで半分とは……。

しかし、グレーテルは妥協したくはなかった。魔女にとって体の一部のようなものだ。

「じゃあ、ほかも見ていいですか？」

そうして、グレーテルは夜が更けるまでずっとほうきや魔法道具をみていた。

「この問題、じゃあ、出席番号7番……志魔野！」

2時間目の数学の授業、志魔野は不幸なことに教師にあてられてしまった。志魔野の嫌いなタイプの教師ランキング1位は出席番号であてる教師であった。学校では一切話さない主義の志魔野にとって、これは大変苦痛であった。

「……。」

教師も含めて教室中の誰もが思った通り、志魔野は言葉を発さなかった。

その時、突然校庭に面した窓があき、一通の手紙らしきものが教室に舞い込んだ。

その手紙はひらひらと風にのりとうとう志魔野のところまでやってきた。志魔野はそれを手に取り、読むと顔をしかめた。それは予想通りグレーテルからのものだった。

内容は”魔法用品店にいます。バイトが終わったらすぐに来てください”というものだった。

学校では静かに、というスタンスを打ち破られた志魔野は腹が立ったのかドンっと机をたたいた。

（まったく、あいつ……。もっと静かに手紙送れよ。）

そう思っていると、驚いて固まっていたクラスメイト達が一斉に話し出した。

先生はずっと「静かにしろ！」と言っているし、不良もどきの奴らは下品に笑い声をあげている。

不愉快な空間だ。せっかく、だれとも関わらず高校生活を過ごしていたのに、これでは学校のちょっとした有名人だ。

そのあとは授業にならず、休み時間がやってきた。志魔野にとっては地獄の。

「おい、志魔野、今のなんだ？」

クラスの中心人物である男が仲間を連れ、声をかけてきた。もちろん名前は知らない。

「……。」

ここは話さないほうが賢明だと考えた志魔野は、沈黙を続けた。そしてそのあと、トイレに籠ることにした。

ーーーキーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴るのを見計らってトイレから戻ってきた志魔野は席についた。これが友達のいないやつの本気だ、志魔野はそう思った。

ーーーキーンコーンカーンコーン

あれから何回トイレ籠城を繰り返したことだろう。

クラスのやつらももう聞いてくることはなくなった。

ようやく帰れる…そう思ったとき、最後に立ちはだかったのは一人の女子だった。

その女の子は今までの奴らとは違う真剣な目をしていた。

「ねぇ、志魔野君、ちょっと話があるんだけど。」

「……。」

今までの奴らとは違う、といえ、学校では話す気がしなかったので、やはり沈黙をつづけた。
すると、その女の子は近づいてきて小さな声で話だした。

「…あれって、魔女の仕業?」

志魔野はドキリとした。
ここまで来ては話すしかないと思い、人が残っている教室で口を開いた。

「違う。俺に関わらないでくれ。」

そんな淡白な言葉を残し、志魔野は去っていった。

シマノ、過去を語る？

ようやくバイトが終わった。今日も某ハンバーグ屋でバイトだった。
この場所は学校からあまり離れていないところに位置している。高校の連中もよくくるが、徒歩しか交通手段がない志魔野にとっては仕方がないことだった。
ハンバーグ屋のある大通りから細い道に入り、少し歩くと、古い商店街立ち並んでいる。
その一角に駄菓子屋がある。看板には田村商店と書いてあった。

「すいませーん！」

インターフォンが無かったので、志魔野は直接声をかけた。

「はーい、志魔野様ですね、お待ちしておりました。」

そういって出てきたのはアスミだった。
アスミの後について二階に上ると、そこにはグレーテルがいた。

「遅いわ。待ちくたびれちゃった。」

そういったグレーテルはいつもより少し疲れており、眠そうな顔をしていた。

「ごめん、ごめん。」

「じゃあ、気を取り直して。今日は貴方の妹のことで話があるの。ナズナさんはこの地区の霊魂管理を行っているわ。」

そうすると、隣に座っていたナズナが会釈したので、志魔野も返した。

「霊魂管理は人間界にいる魔女の仕事で、それぞれ人間の魂を管理しているの。そして、貴方の妹、志魔野カオルはここから数キロ離れた町で殺された…はずでしょ？」

「ああ。」

志魔野は息を飲んだ。これじゃまるで、カオルが生きているような言い方だ。

「……それが実は、志魔野カオルは死んではいない。死んだら霊魂手帳に名前がのるはずなのに、彼女はまだ載っていないわ。」

「じゃあ、カオルは！！」

志魔野は今まで見せたことのないような顔で喜んだ。

しかし、グレーテルはまだうかない顔をしていた。

「…でもね、この世にはいないの。」

「どういうことだよ！」

グレーテルの言ったことは矛盾していた。死んでいないのに、この世にいないなんて……。

「私とナズナさんが魔法で調べた結果、人間界に彼女はいなかった。私の予想では彼女は恐らく魔界にいるわ。」

「なんで魔界に！？」

志魔野でさえ、ヘンゼルに出会うまで魔女や魔界に関わったことはない。なのになぜカオルは魔界に？
志魔野は不思議で仕方がなかった。

「私にもわからない……。ただ、ヘンゼルは何か知っていたようだわ。それで、貴方には、妹が殺されたときのことを教えて欲しいの。嫌かもしれないけど、何かの糸口になるかも知れないわ！」

グレーテルの目は涙をため、今にも泣きそうだった。理由はわからないが、気持ちが高まっているようだった。

「……わかった。話すよ…全部。」

そして、過去のことを一切話さなかった志魔野は自分の過去を話しだした。

シマノ、過去を語る？

「俺たちの親は最悪な親だった。……でも、最初は普通の家族だったかもしれない。ある時会社をリストラされた父親は借金まみれになって、母親は出ていった。
そのあと父親は飲んだくれになって、毎日毎日家で酒を飲んでいた。アルコール中毒ってやつだ。
その頃には家は貧窮して、まともな生活は出来なくなって、食いつなぐことさえ難しくなっていた。それでもカオルは家事をして、母親の代わりになろうと頑張っていた。
でも、ある時から父親は暴力をふるうようになったんだ。殴る蹴るは当たり前、他にもタバコの火を押し付けられたりした。」

「ただいまー。」

「お帰り、お兄ちゃん。」

カオルはつらい境遇を感じさせない笑顔で言った。

机では父親が寝ている。酒を飲みながら寝てしまったんだろう。

時間は夕飯時だった。

「お兄ちゃん、夜ご飯にしよっか？」

カオルはそういうと作ってあったご飯を並べはじめた。机は父がいたので、しかたなく二人は床でご飯を食べることにした。

夜ご飯といってもあるのはご飯と味噌汁だけ。この家庭にとってこれが限界だった。

「箸とってくれ。」

コウがそういうと、カオルは箸をとり、コウに渡そうとした。しかし、何かに気付いたようにカオルは箸を逆の手に持ちかえてコウに渡した。

「……お前、何か隠してるだろ？」

そういってコウはカオルの手を掴み、手繰り寄せた。

カオルのきれいな手に、何故か焼けただれた点があった。……恐らくタバコだ。それをコウが発見したと同時にカオルは手を後ろに回した。

「ううん、なにもないよ！」

カオルはいつものトーンで言った。

「あいつにやられたんだろ！？」

コウが強く聞くと、カオルは小さく頷いた。

「大丈夫、痛くないから。それよりご飯食べよ？ね？」

カオルはさらに明るく振る舞って言った。

コウは知っていた。あの痛みも、親に傷つけられたという悲しみも。カオルが大丈夫なわけが無い。

「ごめん…、俺、守れなくて。」

コウは泣き出した。妹であるはずのカオルが我慢しているのにみっともない、と思ったが、やはりそれしか出来なかった。

カオルはそれを見て困惑した。しかし、コウはまだ話し続けた。

「俺が高校生になったら、一緒に家をでよう。それで二人で暮らすんだ。良いだろ？」

コウは涙を拭って言った。

「うん、約束ね！」

そして、指切りをした。中学生にもなって幼稚な行動だったかもしれないが、二人には関係なかった。

それからコウは少し良い気分だった。早く高校生になって…、その思いで頭はいっぱいだった。
その暮らしだって、楽では無いはずだ。それはコウにもわかっていたが、今の生活よりも良いものになると確信していたので、楽しみで仕方なかった。

それから数日。

「ただいま。」

いつものように遅い時間にコウは帰った。

「……。」

いつもならあるはずの声がない。
心配になったコウは急いで家にあがり、部屋の扉をあけた。

「……そこには父親の死体が転がっていた。どんな風に死んでたかは覚えない。それどころか、それ以降の記憶も……。

次に俺がいたのは警察署だった。そこで警察は犯人は捕まり、それは父に恨みがあるやつだと言っていた。実際俺も殺意が湧いたことはあるし、恨まれて当然だったので、父親が死んだのは自業自得だと思って、いたって冷静にいられた。

でも、カオルのことを聞いたときは発狂しそうになったよ。

犯人はカオルを連れ去り、最初は売ろうとしたらしい。でも結局、途中で暴行して、殺したらしい。死体は山で捨てられたらしいが、未だに見つかってないんだ。妹に関することはこれぐらいかな。」

過去を全て話したコウはすっきりとした顔をしていた。

「……ごめん、空気重いよな。」

「いいえ、話しにくいことを話してくれてありがとう、コウ。」

そういったグレーテルの隣を見ると、ナズナさんが号泣していた。

「……えっとー、ナズナさん？」

「可哀相に！もう、何て言っていいか分からないわ！私を頼っていいからね、そんなつらい境遇で…。よく耐えてきたね！」

そういって涙を流しながら、志魔野の頭を撫でた。

感情が高ぶりすぎてすごく大きな声だった。

「いや、そんな……。」

「じゃあ、一旦休憩ね。」

今までの重苦しい空気はどこにいったのか、グレーテルは休憩をとるように勧めた。

「そうね、お菓子食べなさい。」

ナズナがいうと、アスミは大量の駄菓子を差し出した。

魔女には好い人がたくさんいるようだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9739z/

魔法使いの弟子

2012年1月6日09時11分発行